

フランスにおける高等師範学校の拡張過程

大前 敦 巳*

(令和元年8月23日受付；令和元年11月28日受理)

要 旨

本稿は、フランスで大革命期の創設にさかのぼる高等師範学校が、共和国建設に向けた教員養成の近代職業教育を担ってきた中で、パリのユルム校から、セーヴル、フォントネー＝オ＝ローズの女子高等師範、サン＝クルーからリヨンに移転した高等師範、カシヤンの技術教育高等師範、戦後の一時期に存在した体育高等師範へと拡大した歴史をたどり、主に制度面の拡張過程に着目した社会的特質を考察した。その過程は、男性から女性へ、上流階級から他の階級へ、ギリシャ・ラテンの古典語から近代的なフランス語へ、文科と理科に加えて男女とも技術教育や体育教育といった実用的な学問分野へと広がった。技術教育高等師範は著名校となってめざましい拡大を遂げたが、体育高等師範のほうは再編統合の末、大学の教育課程に移譲された。地理的には、後発の高等師範学校がパリの南部から西部にかけての近郊に拡充され、近年ではリヨン、レンヌの地方への設置も進められた。国家の庇護による手厚いエリート主義教育を堅持してきた高等師範学校は、修道院を起源とする全寮制の教育から、共和制の脱宗教的（ライック）な近代学校制度に移行することにより、宗教教育から引き離した代替の高等教育機関を作り出すことに寄与した。そこには革命や戦争などを契機として、社会の変化に適應する幅広い人材養成の必要性に応えるとともに、教育選抜と学歴資格に基礎を置いた新たな世襲集団たる「国家貴族」の創出を見出すことができる。

KEY WORDS

higher normal school 高等師範学校

Paris パリ

history of higher education 高等教育史

comparison with France 日仏比較

1 文化的再生産の「本山」？

フランスの高等師範学校(école normale supérieure : ENS)は、大学よりも威信の高いエリート教育を行うグランドゼコールの一つであるが、歴史的にみるとフランス革命期の共和国建設に端を発する教員養成の近代職業専門教育から始まり、ブルジョワ階級文化の再生産だけでなく、他の社会層に開かれた教育も志向してきた。1794年に国民公会により創設された師範学校は、2度の廃止を経ながらも、1845年に高等師範学校となり¹⁾、47年にユルム街に移転し、第三共和政期には著名な研究者や知識人を輩出する名声を博していった(宮脇, 1968, Jeannin, 1994, 柏倉, 1996→2011, 渡辺, 2001など)。入学者の属性は、パリや大都市出身の文化的に豊かで少数の子どもに熱心な教育を施す上中流階級の子弟が多かった(Smith, 1982, 向井, 1997)。入学定員は戦前は一時期を除いて50名以下に抑えられ、1985年に女子高等師範と統合した現在も400名にすぎず、それ以外に大学博士課程、公務員、留学生などの編入も受け入れているが、マルサス主義的な定員抑制による質保証と厳しい選抜が行われてきた。それでもなお、頂点のパリ・ユルム校に加えて、セーヴル、フォントネー＝オ＝ローズの女子高等師範、サン＝クルーからリヨンに移転した高等師範、カシヤンの技術教育高等師範、戦後の一時期に存在した体育高等師範へと拡大発展を遂げた歴史もみられるのであり、本稿では主に制度面での拡張過程に着目した社会的特質を考察する。

高等師範学校の起源は、エミール・デュルケム『フランス教育思想史』の中で述べられたように、アンシアン・レジーム期に中等教育の発展をもたらしたジェスイット(イエズス会)のコレージュにある²⁾。イエズス会が1762年に追放され、聖職者教師が不在になった後の教員養成問題として、1766年のアグレガシオン(agrégation: 高等教授資格)と1794年の師範学校の創設が企図された(宮脇, 1968, メナール, 1997)。高等師範学校の生徒は、修学期間中に文科と理科に分かれてリサンス(学士)の学位を取得し、最終年次にアグレガシオンの取得を目指して寄宿生活を送った。アグレガシオンは、高等師範学校および高等教育水準の学生を対象に、リセ(高等学校)以上の教授職に就くための資格で、一般の教員免状よりも威信が高く、勤務条件も優遇される「フランス的例外」の教員資格制度とし

*学校教育学系

て今日まで存続している (Chervel, 1993, Verneuil, 2005)。

表1 日仏の高等師範教育の拡大 (戦前期)

| フランス | 日本 |
|---|---|
| 1794 師範学校創設 | 1872 昌平黌跡に師範学校創設, 学制発布 |
| 1845 高等師範学校開設 | 1875 東京師範学校に中学師範学科設置 |
| 1847 高等師範学校ユルム街移転 | 東京女子師範学校創設 |
| 1880 フォントネー=オ=ローズ高等師範学校 (女子) 創設 | 1877 東京大学創設 |
| 1881 セーヴル女子中等教員師範学校創設 | 1886 帝国大学, 高等師範学校開設 |
| 1882 サン=クルー高等師範学校 (男子) 創設 | 1890 女子高等師範学校開設 |
| 1887 パリ大学に教育学講座創設 | 1899 東京専門学校, 哲学館, 国学院に中等教員 無試験検定資格許可 |
| 1903 高等師範学校をパリ大学に統合 | 1902 広島高等師範学校創設 |
| 1912 技術教育師範学校創設 | 1905 女子英学塾に中等教員無試験検定資格許可 |
| 1932 技術教育高等師範学校開設 | 1908 奈良女子高等師範学校創設 |
| 1933 体育師範学校創設 | 1929 東京・広島文理科大学創設 |
| 1936 セーヴル女子高等師範学校開設 | 1944 金沢高等師範学校創設 |
| 1945 フォントネー, サン=クルー中等教育準備 高等師範学校開設 (1987 リヨン移転) 体育高等師範学校開設 (1975 統廃合) | 1945 岡崎高等師範学校創設 広島女子高等師範学校創設 |
| | 1949 東京教育・お茶の水女子大学創設 |

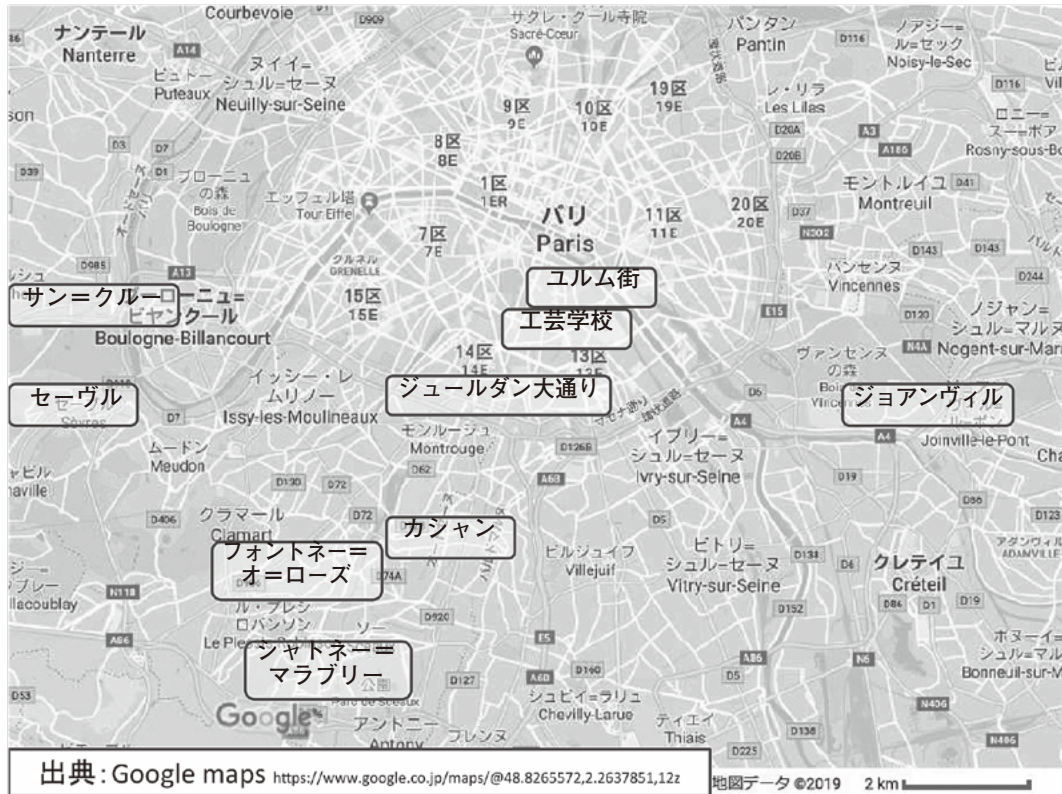
(筆者作成)

2 女子高等師範への拡張

女子教育においては、19世紀に教会の影響下から公教育への移行が進み、第三共和政期にジュール・フェリー文相の下で女子中等教育や義務教育が制度化されたことに伴い、1881年に女子中等教員師範学校(école normale de professeurs-femmes)がパリ南西郊外セーヴルの陶器工場跡に設置された³⁾。法制定の中心人物であったカミーユ・セーは、当初用途の定まらない国有施設のうち北部都市コンピエーニュの宮殿に全寮制学校を作るのが適していると考えたが、パリの著名な教授陣が容易に来校できることを配慮して、北部郊外のサン=ドニや南部郊外のフォントネー=オ=ローズも検討した後、セーヴルに設置することに決定した (Mayeur, 1977 : p.114, 1994 : p.79)。

校長は初代のジュリー・ファーヴルから女性が続き、教授団は全体的に若い教員が多く着任し長く定着した。教授団の任務は、女子学生に教育を施すとともに、「女教師職(métier d'éducatrices)」に就く準備を行うことにあった。教授たちは、職業に必要な知識に加えて、学業・研究・真実への愛を訴えて「一般教養(culture générale)」の伝達に専心した (Mayeur, 1994 : pp.82-83)。修学期間は3年間で、女子中等学校の教員資格(certificat)が与えられたほか、1883年にリセの教授資格となる女性アグレガシオンが創設された⁴⁾。1905年から女性に男性アグレガシオンの受験が可能になり、08年から38年までユルム校で女性の入学試験が認められた (10年に女性が初めて合格したが「聴講奨学生(« boursières d'études »)」でしか認められず、24年にアグレガシオンと入学試験が男女共通化され、27年にユルム校で初の女性学生が在籍した) (ENSJF, 1959 : p.4)。1861年に女性が初めてバカロレアに合格して以来、大学やユルム校 (1927~40年) でも女性を受け入れていた (上垣, 2008=2016)。

学校生活は基本的に全寮制で、1931年から自宅通学生(externe)が認められた。1890年からは外国人留学生も受け入れるようになった。19世紀末から共和制が安定してくると、古典文学を中心とした教育だけでなく、科学実験、写真、地図などを導入したり、遺跡や歴史的建造物の見学を行う遠足を行うなどの「実物教育」を積極的に導入していった (上垣, 2008=2016 : pp.140-141)。1936年に女子高等師範学校(ENS de jeunes filles)になり、高等教育機関として位置づけられた。37年には2名の学生がソルボンヌでリサンス(学士)課程に登録し、39年から公式に大学課程に登録することが求められた。ドイツ占領期に一時的にパリ市内に移転した後、49年から85年のユルム校統合までパリ市内南部に校舎が置かれた (田村, 1993, Mayeur, 1977, 1994)。女子高等師範も定員は抑制され、女子教育の発展を先導する教員や研究者を輩出した。卒業後は、パリのカルチエ・ラタンにある女子校のリセ・フェヌロン(Lycée Fénelon)を頂点に、中等学校の教員や校長のキャリアを多く歩んでいった。創設当時約10年間の入学生における女性教職キャリアを歴史的にたどったMargadant (1990) は、ジェンダー、家族、階級、宗教、政治などの様々



なジレンマや葛藤を抱えた制約を受けながら、中等教員や校長の職務に向き合ってきた様相を描出した。

1880年には、パリ南郊のフロントネー＝オ＝ローズに師範学校と高等小学校の女性教員を養成する学校が創設され、87年に初等教育高等師範学校(ENS de l'enseignement primaire)となった。当初はアリエ県のイズールにあった司教館に設置する予定であったが、改修費用をめぐる反対が続いたため断念し、フロントネー＝オ＝ローズにパリ市が接収していた用地を買収して校地を得ることができた⁵⁾ (Oulhiou, 1981 : pp.10-11)。46年にパリ南部のダンフェール＝ロシュローからフロントネー＝オ＝ローズの南に隣接するソー (93年から現在のRER-B号線フロントネー＝オ＝ローズを経てロバンソン駅) まで鉄道が開通しており、77年からはサンジェルマン＝デ＝プレから動物牽引の路面列車も通っていたことから、交通の便は良好であった。

時期的に高等師範学校としては2番目の設置であり、1879年にジュール・フェリー文相が各県に女性師範学校の設置を求める法律を制定したことが背景にあった。創設当初はこれまで教育を受けなかった庶民の女子を教育する教員養成が目的に掲げられた (Oulhiou, 1981 : p.1)。初年度は、30名の志願者に対して、理科8名、文科14名、年齢は18～27歳までの計22名に入学が許可された。初代校長には、レンヌのブルジョワ家庭出身でベルギー人の男爵と結婚したジャンヌ・ド・フリードベルグが着任した。彼女は、60年に夫と死別して3人の子供を持つ寡婦となり、数々の教職を経て73年にセーヌ県師範学校長に任命された経歴をもつ (Oulhiou, 1981 : p.10)。修学期間は2年間で、共和国理念に基づく市民の育成を使命とする教育が行われ⁶⁾、主に義務教育をリードする女性教員や校長を輩出し、比較的順調に学校の発展を遂げていった。

1940年のドイツ占領期に中学校国立準備学校に改組された後、45年に中等教育準備高等師範学校(ENS préparatoire à l'enseignement du second degré)となり、他の高等師範学校と同様に3年の修学期間に延ばされ、アグレガシオンの取得を目指すようになった。全寮制の教育が行われて独自の文化が発展し、その精神を具現して建築された校舎は「脱宗教的なポール・ロワイヤル女子修道院」と呼ばれた (Le Coeur, 2007)。学寮のみならず、書籍、地図、実験器具、ピアノなどの設備も整えられ、学生たちは恵まれた環境の中で、自由な気風の手厚い教育を受けることができた (Oulhiou, 1981 : pp.64-70)。パリからの交通の便がよかったことから、生活は学寮に閉ざされることなく、セーヴル校と同様にパリの美術館や劇場などに外出する機会も多かった。81年には男子のサン＝クルー校と入学試験が共通化されて共学となり、87年に同校と統合した。

3 サン＝クルー， フォントネー＝オ＝ローズからリヨンへ

1882年にセーヴル北隣のサン＝クルーに男性の師範学校と高等小学校の教員養成学校が創設され、87年に初等教育高等師範学校（男子）となった⁷⁾。フォントネー＝オ＝ローズ校とともに、ラテン語を義務としない「近代的」で無償の学校として学生を受け入れた(ENS Lyonホームページ：<http://www.ens-lyon.fr/lecole/nous-connaître/histoire>)。

ユルム校とは異なり、設立当初は庶民・中流階級出身で地方出身の学生が多かった(Luc et Barbé, 1982)。創設当初の出願資格は、初等師範学校卒業資格(brevet supérieur)またはバカロレア取得であり、入学者の多くはすでに教職経験をもつ者であった。実質的には事前選抜があり、初等教育時に成績優秀による奨学金受給から始まり、師範学校への入学選抜を経て、そこでさらに成績優秀であることが求められた。1894年にあるコレージュにサン＝クルーの準備学級が初めて開設され、95年からは師範学校出身者以外にも、バカロレア取得後に大学や準備学級で学んだ学生が入学するようになった(Luc et Barbé, 1982: pp.19-21)。20世紀に入ると、準備学級が志願者の質を向上させ、教職経験をもたないリセ出身の学生が増加し、学生の年齢層も若年化していった⁸⁾(Luc, 1980: p.51)。

初代校長のエドゥアール＝オーギュスト・ジャクレは敬虔なカトリック信者であり、修道院のような規律正しい全寮制の修学規則を定めた一方、共和国の脱宗教的な人民の教育を謙虚に実践するライックな聖職者(saints laïcs)を理想とする「サン＝クルーの精神」が形成されていった(Luc et Barbé, 1982: pp.44-50)。修学期間は2年間であったが、1897年に3年間に延長され、1907年から大学での聴講が可能になり、10年には修了資格がバカロレアと互換されることが認められ、さらに大学で学士を取得することも可能になった⁹⁾(Luc, 1980: p.53)。卒業生はクルチエ(cloutiers)と呼ばれ、大多数は高等小学校と師範学校の教職に就き、さらにキャリアを重ねて校長や中等以上の教員になる者も多く、創設翌年の1883年から同窓会組織を作っていた¹⁰⁾。

フォントネー＝オ＝ローズ校と同じく第二次世界大戦期の改編後、1945年に修学期間3年の中等教育準備高等師範学校となり、ユルム校に続く選抜度の高いグランドゼコールに発展していった。87年に理科系の一部がローヌ＝アルプ地方のリヨンに移転し、文科系はフォントネー＝オ＝ローズ校と統合して、2000年には文科系もリヨンに移転した。10年にはリヨンで理科と文科の両校が統合した。ユルム街にあった国立教育研究所(institut national de recherche pédagogique: INRP)も、05年にリヨンに移転した後、11年にフランス教育研究所(institut français de l'éducation: IFE)となり、リヨン高等師範学校の附設になった。

4 技術教育高等師範と体育高等師範

さらに技術系と体育系の高等師範学校も開設された。技術系では、1912年に前身の技術教育師範学校(école normale de l'enseignement technique: ENET)がパリ工芸学校内に創設され、32年に技術教育高等師範学校(ENS de l'enseignement technique: ENSET)になった。技術系グランドゼコールは、1747年創立の土木橋梁学校、80年創立の工芸学校、83年創立の鉱山学校、94年創立の理工科学校など古くからあるが、高等小学校レベルの技術系学校として1892年に商業・工業実習学校(école pratique du commerce et de l'industrie: EPCI)が設立される前に、技術系の教員養成を目的としてシャロン工芸学校内に師範学校部が設置され、その後商業系や女性の師範学校部も開設され、1912年のENET創設へと発展を遂げた。ENETは創設当初から男女共学で、入学試験に学歴資格要件を設けないという特色があった。25年にはEPCIの上に中等教育レベルの国立職業学校(école nationale professionnelle: ENP)が整備され、その卒業生がENETに進学する系統が確立した。そして32年には、サン＝クルー、フォントネー＝オ＝ローズ校と同等のENSETに昇格するに至った(Chapoulie, 2013: pp.29-32)。

ENET初代校長のアンドレ・フォントノーは、通商産業省の次官も務める外部からの派遣であり、創設後しばらくは独自の校長、予算、校舎を備えなかった。修学期間は2年で、創設当初は次の5つの部門から構成された。①男子工業部門A(2年次より応用教育学、工業物理・電気、化学、機械)、②同部門B(応用教育学、工業製図、応用記述幾何学、応用機械、技術)、③女子家政工業部門(数学、理科、製図、手仕事、教育学、道徳など)、④共学商業部門A(応用教育学、外国語、経済地理、商業経済)、⑤同部門B(商業、会計、商業算術、商品化学、法学)(Le Bot, 2013: pp.58-59)。1925年には文科系の共学「文学・外国語」部門、32年のENSET移行後には共学「応用芸術のデッサン」部門が新設された。第二次世界大戦期の改編後、48年に3年制に移行し、57年にパリ南郊のカシャンに移転した。66年には他の高等師範学校と同じく国民教育省高等教育局の所轄になった。

他の高等師範学校と異なるのは、定員や部門を大幅に増加させていったことである。入学者数は、ENET創設年度の26名から、翌13年49名、ENSETになった32年65名、42年99名、カシャン移転後の58年には225名へと増大した¹¹⁾。

57年の移転で男女200名ずつ計400名の収容が可能になったが、学生数は704名となり、58年には900名近くになった。70年に1,000名を超え、74年には1,400名に達した。部門数も、37年の6部門から60年の11部門、74年の18部門へと増加を遂げた。60年には4年次が設けられ、アグレガシオンや58年創設の高等技術教育免状(certificat d'aptitude à l'enseignement technique de degré supérieur)の準備を行うようになり、技術教育の教員養成だけでなく、科学技術研究とその研究者養成にも重点を置いて予算措置を強化していった(Le Bot, 2013)。

76年に文科系がサン＝クルー、フォントネー＝オ＝ローズ校に移された一方、理学と社会科学(経営学)が加えられ、85年に技術教育高等師範はカシャン高等師範学校に改称された。89年からは他のグランドゼコールと同様に5年次課程を開設し、準備学級などを経て3年次入学の入試選抜を行う仕組みも整備された¹²⁾。92年には、カシャン高等師範学校に独自の修士レベル研究深化学位(diplôme d'études approfondies : DEA)と博士(doctorat)の学位が創設され、99年からは実用科学博士課程(école doctorale sciences pratiques : EDSP)も開設されて、「実用科学」の理念が学校の特徴に掲げられた(Le Bot, 2013 : pp.78-79)。

1994年にはブルターニュ地方のレンヌに分校を設置し、2013年にレンヌ高等師範学校となって独立した。07年にカシャン高等師範学校は、近隣の大学・グランドゼコール・研究所が連合した研究・高等教育拠点(pôles de recherche et d'enseignement supérieur : PRES)であるパリ南連合大学(UniverSud Paris)の構成機関となり、14年にはさらに拡大した大学・高等教育機関共同体(communautés d'universités et établissements : COMUE)のパリ・サクレー大学となって、16年にカシャン高等師範はパリ・サクレー高等師範学校に改称された。

体育系では、1852年にパリ南東ヴァンセンヌの森近郊のジョアンヴィルに軍式体育師範学校が創設され、72年に体育・フェンシング師範学校、1925年に高等体育学校、33年に体育師範学校となった後¹³⁾、第二次大戦中の改組を経て45年に体育高等師範学校(ENS d'éducation physique : ENSEP)が開設され(46年に体育スポーツ高等師範学校(ENS d'éducation physique et sportive : ENSEPS)に改称)、女子校はパリ南郊のシャトネー＝マラブリーに移転した。

1948年に修学期間は2年から3年に延長されたが、大学教育との互換はなく、アグレガシオンの準備も行われなかった。男女共学ではあったが、キャンパスは長く男女別に分かれ、その間は校長も男女両校にそれぞれ置かれた(入学定員は各70名)。男子校がスポーツ競技の教育を推進していったのに対し、女子校の初代校長であるイヴォンヌ・シュレルは、スポーツ化よりも女性体育教員養成に重点を置く教育課程(体操やダンスの導入、他教科や一般教養の習得など)を編成していった(Levet-Labry, 2007 : pp.126-128)。この方向性の曖昧さが、教育の一貫性を欠いた齟齬や対立を生み出していった。57年から59年にかけて、ENSEPSに4年次を導入して体育高等免状とアグレガシオンを創設する案が議論されたが、それに相当する教育課程を大学に設置しようとする機会につながることで、体育教育において大学に対するENSEPSの劣位を示す結果となった(Levet-Labry, 2007 : pp.145-147)。

70年にはENSEPSを廃止する方向性の下で男女両校が統合され(定員は半数の各35名に削減)、75年にスポーツ選手を育成する国立スポーツ学院(institut national des sports : INS)¹⁴⁾と統合して、国立スポーツ・体育学院(institut national du sport et de l'éducation physique : INSEP)になり、2009年に国立スポーツ・エキスパート・パフォーマンス学院(略号は同じINSEP)に改称され現在に至る。体育高等師範は、理論家と実践家の間で対立や葛藤が繰り返された体育のディシプリンの中で、主に中等教育の体育教員養成を行ったとともに、スポーツ領域の選手・指導者や研究者も輩出してきた(Levet-Labry, 2007)。体育教員養成は、1968年の高等教育基本法(フォール法)により大学に設置された体育教育の教育研究単位(unité d'enseignement et de recherche en éducation physique et sportive : UER EPS)の下で、75年に開設された体育スポーツ科学技術(science et techniques des activités physiques et sportives : STAPS)コースに引き継がれることになった。

5 社会変化への適応と国家統制

上記のように、中世来の古典教育を伝統とするカルチエ・ラタンから、その南に下るユルム街に建設された高等師範学校を中核に、19世紀以降の国民国家形成に向けて近代学校教育の発展を担う教員養成をリードする人材輩出を企て、学問や社会の発展に寄与する研究者や指導者を生み出してきた。その拡張発展の過程は、男性から女性へ、上流階級から他の階級へ、ギリシャ・ラテンの古典語から近代的なフランス語へ、文科と理科に加えて男女とも技術教育や体育教育といった実用的な学問分野へと広がりをもっていった。ただし、技術教育高等師範は著名グランドゼコールの一つとしてめざましい拡大を遂げた一方、体育高等師範のほうは再編統合の末、大学の教育課程に移譲されることになった。地理的には、後発の高等師範学校がパリの南部から西部にかけての近郊に拡充され、近年ではリヨン、レンヌの地方への設置も進められた。

他方で、同型繁殖的に拡大した大学とは異なり入学定員を抑制し、厳しい選抜をくぐり抜けた学生に寮での共同生

活や資金援助を通じて、国家の庇護による手厚いエリート主義教育を堅持してきた。修道院を起源とする全寮制の教育が、共和制の脱宗教的（ライック）な近代学校制度においても、宗教教育から引き離して代替を作り出すために維持された。現在は中学校を意味するコレージュが、元来は学寮のことであることから、中等教育以上の学校に進学した生徒が寄宿して学業生活を送る場（internat, 私立の場合はpensionnat）を提供してきた（今日でも地方の中学校では存続している）。1880年にはそれを女子中等教育にも拡張する法律（カミーユ・セー法）が、特に宗教教育への回帰を求める守旧派から膨大な費用がかかることへの反対を受けながらも成立した（Mayeur, 1977）。女子高等師範学校では全寮制の女子教育を行う必要性から、歴代の校長も女性が着任し続けた。理科と文科だけでなく、技術教育や体育では創設当初から共学の教員養成が行われてきた。

そこには革命や戦争などを契機として、社会の変化に適応する幅広い人材養成の必要性に応えるとともに、教育選抜と学歴資格に基礎を置いた新たな世襲集団たる「国家貴族」の創出をピエール・ブルデューが見出したように、国家による統制がフランスでは同時に強く作用してきたと考えられる。その点では、国家主導による高等教育拡大が限定的なものに留まり、私立学校や民間の力に大きく依存した日本とは対照的であるように思われる。具体的にどのような社会層から学生や教員が集まって学校生活を経験し、卒業後にどのような仕事に就いていったのかについては、今後の課題としたい。

注

¹⁾ 1845年に「高等師範学校」の名称が付されたのは、ごく一時的であるが、南仏のエク・アン・プロヴァンスに中等教育師範学校（*école normale secondaire*）が創設されたことに伴うものである（Chervel, 1993 : p.85）。本報告ではユルム校の歴史については省略させていただくが、修学期間は創設当初の2年間から1815年に3年間となり（26～29年は2年間に短縮）、1931年から4年間に延長された。入学要件は、1826年からバカロレア取得が必要とされ、19世紀末からは、ENSの入学試験が難関になったことから、リセに準備学級が設置されるようになり、しばしば飛び級を伴って優秀な成績でバカロレアを取得した後、準備学級を経てENSの入学試験を受ける進学ルートが確立していった。1903年から54年までENSはパリ大学に統合され、ENSに所属する教授団がなくなり、学生はソルボンヌに出向いて講義や演習を受けていた。

²⁾ ジェスイットのコレージュは、中世のスコラ学の修道会学校から12～13世紀の大学の出現を経て、学生を寄宿させた学寮（コレージュ）を基礎として、16世紀のルネッサンス期における百科全書的・人文主義的な新知識の導入とともに、1534年にイグナチオ・デ・ロヨラらにより設立されたイエズス会が、大学に対峙する教育の組合を發展させたことに始まる。1551年にアンリⅡ世からコレージュを開設する免許を取得し、現在の名門リセ・ルイ・ル・グランの前身となるクレルモン・コレージュなどを中心に、17～18世紀に急速に学生の人気を獲得していった。デュルケムによれば、「ジェスイットの目的は、生徒に古代文明を知らせ、理解させることでは決してなく、専らギリシャ語とラテン語で話し、書くことを学ばせることであった」（Durkheim, 1938=1981 : p.497）と述べられ、次のような形式的学習の強化による競争の制度を導入したところに特色があった。「生徒をはげしい、形式的な、しかし内容のない勉強に導くためには、生徒の周囲を監視的配慮でとりまき、それを強化するだけでは足りないのである。つまり生徒を一面抑制し、他方支持するよう常に注意を払うだけでは充分ではなく、さらに、生徒に刺戟を与えることが必要であった。このためジェスイットが用いた刺戟は、専ら競争心であった。ジェスイットはコレージュにおいて競争の制度を組織したばかりでなく、それを後世が到底まねできない程度にまで一挙に發展させたのである」（Durkheim, 1938=1981 : p.519）。しかしながら、イエズス会は絶対王政下で弾圧を受け、18世紀後半にヨーロッパ各国から追放された。

³⁾ 前年の1880年に女子中等教育を設置する法律（カミーユ・セー法）が制定され、それを受けて十分な準備期間がないまま学校設置が急いで進められ、学生募集も緊急に行われた。第1期生の志願者は75名しかなく、うち46名が合格し、40名が入学した。年齢制限や資格条件はなく、合格者のうち20名は教職経験者で、バカロレア取得者は5名しかなく、国家資格を授与しない修道会学校出身と思われる者も2名いた。合格者の半数以上はパリ、北部、東部地域の出身で、リヨン地域出身者は3名、南部と西部地域の出身者は9名であった。全寮制であったため平均年齢はあまり高くなく、志願者のうち45名が20歳未満、21名が20～23歳、9名がそれを越える年齢であった（Mayeur, 1977 : pp.106-112）。

⁴⁾ 当時の女性アグレガシオンは文科と理科の2種類があり、さらに文科は文学・文法、歴史・地理、理科は数学、物理、自然科学に区分された。女性アグレガシオンには、男性アグレガシオンにある哲学の区分は認められなかった。1883年度は、セーヴルの39名の学生のうち、2名が教員資格を取得しなかった一方、9名しか女性アグレガシオンを取得して卒業しなかった（Mayeur, 1977 : p.132）。

⁵⁾ この地は、ルイ14世時代から貴族やブルジョワの城館があったところで、大革命後は著名な彫刻家のバジュー家が1870年まで居住し、普仏戦争による破壊を免れることができず、その後はパリに住む人々が公共の場としてバカンスや休日を過ごす場所となっており、パリ市の女学校が一時的に入居することもあった。国に売却された1880年開校当初の建物は散乱して荒廃していた（Oulhiou, 1981 : pp.11-12）。

⁶⁾ 創設当初の教授陣は、リセ・アンリ4世校の哲学教授で後にソルボンヌの教育学講座に就くアンリ・マリオン、彼の友人で

フランス文学担当のシャルル・ビゴ、歴史学教授のアルベール・ソレル、国立博物館教授で自然科学担当のスタニスラス・ムニエ、数学教授のエドゥアール・ムルグ、教授学担当のガブリエル・コンペイレらの錚々たるメンバーが招聘され、近代科学の要素を取り入れて先進的な授業が行われた様子が記されている (Oulhiou, 1981 : pp.31-58)。

⁷⁾ 1881年3月から創設時までは、セーヴル女子中等教員師範学校の第1期生が入居する前の建物に、師範学校教員免状の準備学級(cours préparatoires au certificat d'aptitude à l'enseignement dans les écoles normales : CAEN)が仮入居し、創設とともに普仏戦争で焼けたサン＝クルー城跡の建物に転居した (Luc et Barbé, 1982 : p.14)。

⁸⁾ 1933年までリセ出身の入学者はごく少数にすぎなかったが、34年以降になると、世界恐慌の影響を受けてリセ卒業者の就職が困難になり、「知的失業者」が社会問題になったことから、サン＝クルー校に入学して教職を目指す学生が飛躍的に増大した。37年入学者の中には、ユルム校への進学を考えていた者も現れた (Luc et Barbé, 1982 : p.104)。

⁹⁾ この修了資格の互換措置は、セーヴルとフォントネー＝オ＝ローズ的女子校でも認められた。しかしながら、修了時に20歳代半ばになり、古典語や古典文化の知識が不足していた中で、大学で修学を継続するためには猛烈な好奇心と不屈の努力が必要であり、当時18歳前後でリセからバカロレアを取得して大学に進学するコースとは歴然とした格差と障壁があった。さらには大学に進学したとしても、新設されて間もないマージナルな位置にある教育学の講義を受けるしか適したものがなかった (Luc et Barbé, 1982 : pp.38-41)。

¹⁰⁾ 20世紀に入り高等小学校やコレージュ・リセへの進学者が増えてくると、高等小学校や師範学校の教員になった卒業生たちを中心に、分岐型の中等教育を廃して統一学校(école unique)の設立と待遇の改善を要求する運動に参加していった (Luc et Barbé, 1982 : pp.73-77)。戦前の分岐型教育においては、男子ではサン＝クルー校のみが、高等小学校から師範学校を経て入学し、卒業後に高等教育にアクセスできる進学ルートであり、その選抜の頂点に立つ学校であった。卒業生の多くも、その選抜を体現して高等小学校の教職に就いていった。

¹¹⁾ ENSET名称変更されてから志願者数も増大し、1932年は65名の定員のうち、男性の志願者は207名、合格者は49名で合格率23%、女性の志願者は170名、合格者は19人で合格率9%であった。36年には男女計631名の志願者にのぼった (Le Bot, 2013 : p.63)。

¹²⁾ 現在は、2年間の準備学級を経て3年次レベルから入学し(定員250名)、4年間の修学期間で修士レベル学位を取得するカリキュラムになっており、加えて大学3～4年次修了を経て4年次レベルから編入し(定員45名)、3年間で修士レベル学位を取得するコースもあるほか、大学修了者を対象に書類選考(または口述試験)により編入するプログラム、社会人を対象とする継続教育プログラム、留学生を対象とする給費プログラムなど、多様な受け入れが可能になっている (ENS Paris-Saclay ホームページより <http://ens-paris-saclay.fr/admission>)。

¹³⁾ 体育師範学校は、体育教育を担当する国家次官の直轄の下に置かれ、管理運営はパリ大学に特定予算が付与されて実施された。入学要件は、第一段階の体育教員免状(certificat d'aptitude au professorat de l'éducation physique 1^{ère} partie)の取得者とし、2年間の修学期間で第二段階の体育教員免状の取得を目指した(初年度入学生26名、翌1935年入学生18名)。35年に学校固有の予算が付与されたが、校舎は予定していたヴァンセンヌの森(ジョアンヴィル)を延期して、パリ南部の大学都市の向かいにあるジュールダン大通り40番地に仮入居することになり、ドイツ占領期の41年から近隣のブリュヌ大通りとトンブ・イソワール通りにある2つのホテルに男女寮を仮転居させ、さらに42年にモンシリ公園通りのホテルを女子寮として間借りした (Levet-Labry, 2007 : pp.30-34)。女子は43年にシャトネー＝マラブリーに移転して戦後ENSEPに移行し、ENSEPの男子校は、開設年の45年はジュールダン大通りに仮設されたが、翌46年にアメリカ軍に占領されていたヴァンセンヌの森に移転した (Levet-Labry, 2007 : pp.121-122)。

¹⁴⁾ INSは、1852年にジョアンヴィルに創設された軍式体育師範学校を起源とし、72年に体育・フェンシング師範学校になった後、1901年に生理学研究が設置され、第一次世界大戦中の16年に体育教練センター(centre d'instruction physique)に改編され、全国で21カ所の地域体育教練センターで指導方法を普及させることを目的としたが、戦後19年に体育・フェンシング師範学校が再建され、25年に高等体育学校となって、スポーツ選手の育成とスポーツの普及に取り組むようになり、第二次世界大戦中の40年に国立コーチ・アスリート学寮(collège national des moniteurs et athlètes)に改編された後、戦後45年にINSの設立に至った (Simonet et Héral, 2010)。

付記：本稿は、JSPS科学研究費補助金(基盤研究(C)19K02883)の助成を受けたものである。

引用参考文献

Chapoulie, Jean-Michel, 2013, « L'ENS Cachan, de l'enseignement technique à l'université du XXI^e siècle », Le Bot, Florent et al. (dir.), *L'ENS Cachan : Le siècle d'une grande école pour les sciences, les techniques, la société*, Presses Universitaires de Rennes, pp.25-36.

Chervel, André, 1993, *Histoire de l'agrégation : Contribution à l'histoire de la culture scolaire*, INRP-KIMÉ.

Durkheim, Émile, 1938, *L'évolution pédagogique en France*, Felix Alcan (P.U.F.). = 1981, 小関藤一郎訳、『フランス教育思想史』, 行路社.

Ecole normale supérieure de jeunes filles (ENSJF), 1959, *Pour le 75^e anniversaire de l'École normale supérieure des jeunes*

- filles*, Cahors : impr. A. Coueslant.
- Jeannin, Pierre, 1994, *Deux siècles à Normale Sup' : Petite histoire d'une Grande École*, Larousse.
- 柏倉康夫, 1996, 『エリートのつくり方—グランド・ゼコールの社会学—』, ちくま新書. →2011, 『指導者 (リーダー) はこうして育つ—フランスの高等教育 グランド・ゼコール—』, 吉田書店.
- Le Bot, Florent, 2013, « Quelle place pour l'ENET-ENSET-ENPET-ENS Cachan ? (1891/1912-2012/2018) », Le Bot, Florent et al. (dir.), *L'ENS Cachan : Le siècle d'une grande école pour les sciences, les techniques, la société*, Presses Universitaires de Rennes, pp.55-83.
- Le Bot, Florent, Albe, Virginie, Bodé, Gérard, Brucy, Guy et Chatel, Élisabeth (dir.), 2013, *L'ENS Cachan : Le siècle d'une grande école pour les sciences, les techniques, la société*, Presses Universitaires de Rennes.
- Le Coeur, Marc, 2007, « Un « Port-Royal laïque » : L'École normale supérieure d'institutrices, à Fontenay-aux-Roses », *Livraisons d'Histoire de l'Architecture*, n° 13, pp.65-76.
- Levet-Labry, Éric, 2007, *Les Écoles Normales Supérieures d'Éducation Physique et Sportive et l'Institut National des Sports : étude comparée des établissements, du régime de Vichy à la création de l'I.N.S.E.P. (1977)*, Thèse de doctorat, Histoire. Université de Marne la Vallée, (=2012, HALホームページ Id: tel-00740433 <https://tel.archives-ouvertes.fr/tel-00740433>).
- Luc, Jean-Noël, 1980, « La formation des professeurs de maîtres d'école en France avant 1914 : L'École Normale Supérieure de Saint-Cloud », *Revue française de pédagogie*, vol. 51, pp. 50-57.
- Luc, Jean-Noël et Barbé, Alain, 1982, *Des Normaliens : histoire de l'École normale supérieure de Saint-Cloud*, Presses de la Fondation nationale des sciences politiques.
- Margadant, Jo Burr, 1990, *Madame le Professeur: Women Educators in the Third Republic*, Princeton University Press.
- Masson, Nicole, 1994, *L'École normale supérieure : Les chemins de la liberté*, Gallimard.
- Mayeur, Françoise, 1977, *L'enseignement secondaire des jeunes filles sous la Troisième République*, Paris, F.N.S.P.
- Mayeur, Françoise, 1994, « Une école soeur ? Sèvres », Sirinelli, Jean-François (dir.), *École normale supérieure : Le livre du bicentenaire*, P.U.F., pp.73-111.
- 宮脇陽三, 1968, 「バリ大学高等師範学校教育の発達過程」, 『皇學館大学紀要』第6号, pp.347-386.
- 向井一夫, 1997, 「第三共和政下フランスの高等教育改革と高等師範学校(1)」, 『椋山女学園大学研究論集』第28号 (社会科学篇), pp.341-353.
- 向井一夫, 1999, 「第三共和政下フランスの高等教育改革と高等師範学校(2)」, 『椋山女学園大学研究論集』第30号 (社会科学篇), pp.141-154.
- メナール, ジャン, 横山裕人訳, 1997, 「エコール・ノルマル・スュペリユールの創立」, 『思想』No.871, pp.136-151.
- Oulhiou, Yvonne, 1981, *L'École normale supérieure de Fontenay-aux-Roses à travers le temps, 1880-1980*, Fontenay-aux-Roses.
- Simonet, Pierre et Héral, Henri, 2010, *De l'école de Joinville à l'INSEP : Visite historique*, INSEPホームページ. https://www.insep.fr/sites/default/files/ecolejoinville_INSEP.pdf
- Sirinelli, Jean-François (dir.), 1994, *École normale supérieure : Le livre du bicentenaire*, P.U.F.
- Smith, Robert, J., 1982, *The École Normale Supérieure and the Third Republic*, State University of New York Press.
- 田村倅, 1993, 「フランス女子高等師範学校覚書」, 『思想』No.824, pp.107-118.
- 上垣豊, 2008, 「ラテン語の障壁を乗り越えて—第三共和政期フランスにおける女子高等教育—」, 香川せつ子・河村貞枝編, 『女性と高等教育—機会拡張と社会的相克—』, 昭和堂, pp.171-195. =2016, 『規律と教養のフランス近代—教育史から読み直す—』, ミネルヴァ書房, pp.123-152.
- Verneuil, Yves., 2005, *Les agrégés : Histoire d'une exception française*, Belin.
- 渡辺和行, 2001, 「近代フランス高等教育におけるエリートの再生産—ファキュルテと高等師範学校—」, 橋本伸也・藤井泰・渡辺和行・遠藤修一・安原義仁, 『近代ヨーロッパの探究4 エリート教育』, ミネルヴァ書房, pp.241-276.

付表 関連年表

| | フランスの高等師範学校関係 | フランス・欧州 | 日本・その他 |
|------|---|-------------------|---------------------------------|
| 1762 | イエズス会コレージュ廃止 | イエズス会追放 | |
| 1766 | アグレガシオン（高等教授資格）創設 | | |
| 1770 | コレージュ・ルイ＝ル＝グランに奨学生制度 | | |
| 1789 | | フランス革命 | 昌平坂学問所開設（1790） |
| 1793 | 大学廃止 | | |
| 1794 | 師範学校（école normale）創設 | | |
| 1795 | 師範学校廃止 | | |
| 1802 | リセ（高等学校）創設 | ナポレオン戦争 | |
| 1808 | 師範寄宿学校（pensionnat normal）開設 帝国大学再建，バカロレア（大学入学資格）創設 | | |
| 1810 | ストラスブールに初等師範学校創設 | | |
| 1822 | 師範寄宿学校廃止 | 王政復古・ウィーン体制 | |
| 1826 | 予備学校（école préparatoire）開設 | | |
| 1836 | 各県に初等師範学校を義務づけ（ギゾー法） | 七月王政 | |
| 1845 | 高等師範学校開設 | | |
| 1847 | 高等師範学校ユルム街移転 | | |
| 1852 | 軍式体育師範学校創設 | 第二帝政 | |
| 1861 | バカロレア試験で女性が初合格 | | 明治維新（1868） |
| 1872 | 体育・フェンシング師範学校開設 | | 師範学校開設・学制発布 東京女子師範学校開設（1875） |
| 1879 | 各県に初等女子師範学校を義務づけ（ポール・バール法） | 第三共和政 | 東京大学創設（1877） |
| 1880 | 女子中等教育学校創設（カミーユ・セー法） フォントネー＝オ＝ローズ初等教育高等師範学校（女子）創設 | | |
| 1881 | セーヴル女子中等教員師範学校創設 | | |
| 1882 | サン＝クルー初等教育高等師範学校（男子）創設 義務教育制度確立（フェリー法） | | 帝国大学設置・高等師範学校設置（1886） |
| 1887 | パリ大学に教育学講座創設 | | 女子高等師範学校開設（1890） |
| 1896 | 大学設置法 | | |
| 1902 | 現代語バカロレア創設 | | 広島高等師範学校創設 |
| 1903 | 高等師範学校をパリ大学に統合 | | 奈良女子高等師範学校創設（1908） |
| 1910 | 高等師範学校（ユルム校）で女性が初合格 | | |
| 1912 | 技術教育師範学校創設 | | |
| 1914 | アグレジェ（高等教授資格取得者）協会設立 | 第一次世界大戦 | |
| 1925 | 高等体育学校開設 | | |
| 1927 | 高等師範学校（ユルム校）で女子学生受け入れ | | |
| 1932 | 技術教育高等師範学校開設 | | |
| 1933 | 体育師範学校創設 | | |
| 1936 | セーヴル女子高等師範学校開設 | | |
| 1940 | セーヴル女子高等師範学校パリ移転 | 第二次世界大戦 ヴィシー体制 | 金沢高等師範学校創設（1944） |
| 1945 | フォントネー＝オ＝ローズ，サン＝クルー中等教育準備高等師範学校開設 体育高等師範学校開設 | 第四共和政 | 岡崎高等師範学校創設 高等師範学校廃止 |

| | | | |
|------|--|------------|-------------------|
| 1946 | 体育スポーツ高等師範学校開設 | | |
| 1949 | セーヴル女子高等師範学校パリ・ジュールダン大通り移転 | | 東京教育大学・お茶の水女子大学創設 |
| 1954 | 高等師範学校（ユルム校）がパリ大学から独立 | | |
| 1957 | 技術教育高師がカシャン移転 | | |
| 1970 | 体育スポーツ高師男女両校を統合 | 第五共和政 | 筑波大学創設（1973） |
| 1975 | 体育スポーツ高師が国立スポーツ・体育学院に併合 大学に体育スポーツ科学技術コースを設置 | | |
| 1976 | 技術教育高師の文科系をフォントネー＝オ＝ローズ，サン＝クルー高師に移行 | | |
| 1985 | ユルム，セーヴル高師統合 技術教育高師がカシャン高等師範学校に改称 | ミッテラン社会党政権 | |
| 1987 | フォントネー＝オ＝ローズ，サン＝クルー高師統合 サン＝クルー高師の理科クラスがリヨン移転 リヨン高等師範学校開設 | | |
| 1994 | 技術教育高師がレンヌに分校開設 | | |
| 2000 | フォントネー＝オ＝ローズ，サン＝クルー高師の文科クラスがリヨン移転 | シラク右派政権 | 国立大学法人化（2004） |
| 2005 | 国立教育研究所がフランス教育研究所となってリヨン高等師範学校に附設 | | 教職大学院開設（2008） |
| 2010 | フォントネー＝オ＝ローズ，サン＝クルー高師の文科クラスがリヨン高等師範学校に統合 | サルコジ右派政権 | |
| 2013 | レンヌ高等師範学校開設 | オランダ社会党政権 | |
| 2016 | カシャン高師がパリ・サクレー高等師範学校に改称 | | |
| 2017 | パリ・ジュールダン大通りに高等師範学校新校舎落成 | | |

Expansion Process of Higher Normal Schools in France

Atsumi OMAE*

ABSTRACT

In this paper, the social characteristics of institutional expansion processes of higher normal schools in France were considered, based on a history of modern vocational education for teacher training toward the construction of the Republic, from the Ulm school in Paris, dating back to its foundation during the French Revolution, to women's higher normal schools in Sèvres and Fontenay-aux-Roses, the secondary and primary higher normal school in Saint-Cloud, which later moved to Lyon, the higher normal school of technical education in Cachan, and the higher normal schools of physical education in the postwar period. This process has spread from men to women, from the upper class to other classes, from classical languages to modern French, and from literature and science to practical studies. The higher normal school of technical education progressed dramatically as an elite institution, but higher normal schools of physical education transferred to the university curriculum after reorganization. Geographically, the new schools expanded to the suburbs from the south to the west of Paris, and in recent years, some schools have been established in the Lyon and Rennes. These higher normal schools continued to maintain an elite education based on national politics, and have contributed to the creation of an alternative higher education that has moved away from religious education, by shifting from schools originating in the monastic system to modern non-religious (*laïque*) schools of the Republic. In conclusion, we find the creation of a "national nobility" (*noblesse d'État*), as a new hereditary group based on educational selection and academic qualifications, emerging in response to the need for wide-ranging human resource development that adapts to the social changes brought about by revolution and war.

* School Education